

## 生きる儘 @ 京大西部講堂

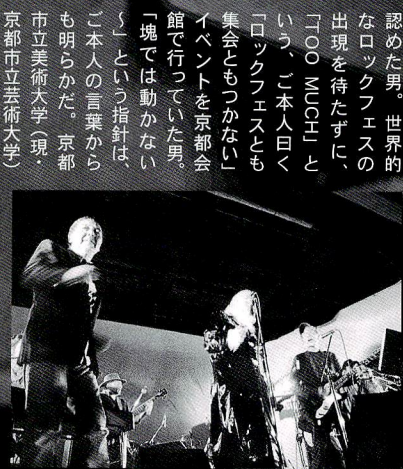
### タクシーの乗務員氏が観たという フランク・ザッパと「Z」の二文字

「京大の、西部講堂までお願いします。タクシーの乗務員氏に伝える。このいうのを巡り合わせというのか、何かのつながりというのか。乗務員氏は問はず語りに言うのだった。「懐かしいですねえ。西部講堂。私が若い頃、フランク・ザッパが来たんですよ。コンサートの何日前にはね、「Z」という文字を出て照らしに、学生達が英文字山に上ってね。私もコンサートは見に行きませんでした。会場はマリファナ臭かったなあ(笑)。当時はグラスと呼んでましたけど。隣に居合わせたヤツにね、ザッパって漢字では『雑糞』って書くんだ、なあって教えてね。喜んでましたよ。学生運動が盛んだった当時、乗務員氏も「身近に連合赤軍のメンバーがいたら、自分も参画していたかもしれない」ということだった。「私たちは団塊の世代ですから。でもね、マルクスだレーニンだと言っていた連中も、今では資本主義社会の重鎮になってるんですよ。当時は社会主義思想に同調しない人間は排斥しようとする、つまり自分と違う考えを持つ者を糾弾してたつてのにな。今のいじめと図式は変わらないですよ。日本人では、結局いつの時代も変わらないうんじやないですかねえ。あまりあの頃の話は、喜んで話せませんねえ。そう言っただけ苦笑した。」

団塊の世代。その語源は字のごとく、塊になって同じ方向を見、同じ行動をするというものだから。その世代に生きるほとんどの人間が、右へ倣えてラッシュしていく。「それは何も、今だって変わらないじゃないか。そういうとも言える。だが、こうも言える。「いつの時代も、塊では動かない人間も、同じように存在する。」

### 60年〜70年代を音楽と共に生きた 京都には、とんでもない大物がいる

同コーナーの後身役をお願いしている木村英輝氏もまた、「一人の「塊では動かない人」であつたのではないか。「ウッドストック」「オルタモント」「ワイト島」……。数々のロックフェスティバルが世界を席巻した当時、京都にあつて、いや日本において、「日本人として、唯一ロックフェスティバルを正しく認識している」と世界が



認めた男。世界的なロックフェスの出現を待たずに、「OCEANO」という、ご本人曰く「ロックフェスとも集会ともつかない」イベントを京都公会館で行っていた男。「塊では動かない」という指針は、ご本人の言葉からも明らかだ。京都市立美術大学(現・京都市立芸術大学)図案科を卒業し、同大学のヴィジュアルデザイン講師として4年間を過ごした。「美大生が右(派)も左(派)もないやろう。そういうのとは違うことをやろう。政治運動でも、芸術運動でも、経済運動でも、宗教運動でもない、全てを乗り越えて、全てを包括するムーヴメントがオレ達の活動だ」。世の中が、とりわけ学生達が塊となつて左に走ったときに、そう言い放つた。そして舞台をこの京大西部講堂に移し、氏は「MOJO WEST」というロック・ムーヴメントを立ち上げた。それはいち美大講師から、イベントオーガナイザーへの転機であつたという。当コーナーで過去にご紹介した「富士オデッセイ」は未だに終わつたが、冒頭のフランク・ザッパを京都に呼んだのも木村氏だ。その木村氏が待つ京大西部講堂へ。件の乗務員氏は、そんなところでたまたま乗せたものである。他にも、ジェフ・ベックやニューヨークドールズを山田野外音楽堂に迎えたり、国内でもあれこれイベントをプロデュースする立場となつた。氏の思想は、京都というサイズで収まるものではなかつたと言え、この街には、大物がいたのである。

### 始まりの地、そして今日は中継地点 京大西部講堂が06年に果たした役目

それを目の当たりにしたのも、やはり京大西部講堂だった。GWの初め、京大西部講堂は「過去にこれほど美しい化粧を経験したことがあるだろうか」と思えるほどの装いをまとつた。とかくアンダーグラウンドなイメージで語られる(実際そうだったとも言えるが)この瓦葺きの建物の、入り口には立派な提灯が立っており、背の高いコンパネで仕切られたトラックジャン用のごき導線を抜け、講堂内にはずいぶん大振りな立派な生け花、なんと茶室までが設けられ、創業寛政六年、当代で十五代を数える蕎麦屋「本家 尾張屋」の出張店舗までが現れた。ステージには巨大なスクリーン。その後ろにはラィウ用のセットが見える。そのスクリーンと、講堂内の壁面に映された絵画の数々。「サイイのファミリー」「スマイリングエレファントとハビネスフロッグ」「シンキング パンサー」「フライング タートル」ダンシングパンピング……。様々な題されたその絵画の生みの親が木村氏である。そのどれもが壁画であり、京都を中心に錚々たる建築物の壁を飾ってきた。還暦を迎え、35年ぶりに画を描き始めた氏であるが、わずか3年あまりで絵画集を上梓するに至る。「生きる儘」自然の成りゆき」と題された画集の出版記念の地は、やはり京大西部講堂に落ち着いたのだ。

### 壇上に立つ泉州男の愛ある毒舌に 薄暮の頃、警沢な笑い声が沸く

晩春の薄暮の頃、開場の時間になる。立錐の余地もなくなつた講堂内を見渡し、ご本人の挨拶は「事前の計算が苦手だね、思ったより来てくれてはるみたいで席が足りひんで、若い人は立つて下さい。(笑)」であつた。



# 政治で わたしは 変われない。

クレームなど出ようはずもない。「キーヤン（木村氏らしいなあ）」と笑う声でそこに聞こえるのみである。ステージに向かって最前列の席に座す御仁が乾杯の音頭を承った。青蓮院門跡、第四十九世門主・東伏見慈晃氏である。お父上は久邇宮邦彦王の第3王子にして香淳皇太后陛下実弟、つまり現天皇の従兄弟にあたるというお血筋である。縁は「青蓮院門跡・華頂殿」の襷絵を木村氏が手がけたことという。さらに、現役の学生達が数十名、「ここは何だ？ 今日は何の場だ？」と怪訝な顔で入ってくる。聞けば立命館大学の客員教授を務める筑紫哲也氏の引率でやってきた学生達という。筑紫氏も壇上で、「木村氏とはいるいるな場面で親交があるが麻雀仲間です」と一言、場内を沸かせる。木村氏と言え「スローライフ」という著書を上梓したばかりの筑紫氏に、「スローライフとか言うてるヤツに限って忙しそうにしろ」と言うて壇上に招いている。続けて曰く、「他にもいろんな人が来てくれます。カッコつけて連れて来るのかもしれないけど、金銭、内田裕也さんも来てくれると思います」。画集の見返しには、木村氏が是非にとコメントを依頼し、2ページにわたって内田氏直筆の祝辞メッセージが掲載されている。35年前の当時、木村氏が「フラワーチルドレンを意識して、ヨレヨレのGジャンを着用していた」と、「個性を出すためか、タバコは中指と薬指に挟んで吸っていた」と、「フランク・ザッパを京都に呼んだ」と、「京大西部講堂でのコンサートはすこかった」と、「ザッパもすこかったが、その男（木村氏）もすこかった」と、「コンサート数日前に京都の学生達100人が大文字に懐中電灯で集結し、灯した『Z』の文字に知的エクスタシーを感じた」と、そして木村氏は能書きが多く、「マルクスレーニン」から「新左翼」の話、「資本論」から「日本変革論」の話、「ジョーベンハウエル」から「ローリング・ストーンズ」の話、そして「最も大事なのはエコノミクや！ 政治もアートも全てケイタイが動かしているんやー」と語ったこと。

## 識者の挨拶と、大女優のアシスト 御大のシャウトを迎えて大回円

木村氏の予想どおり、内田裕也氏は会が始まってずいぶん時間が経つてから現れた。樹木希林さんを伴って。ご夫妻そろって、出入り口にほど近いテーブル席に無造作に腰掛ける。VIP待遇など全く求める風でもない。あまつさえ、行われた抽選会にはくじ箱を持ち、アンスタントを努めたのは樹木希林さんであった。こんなに段取り悪いお手伝いは初めてだわ」と言うて場内がまた沸く。飄々とした立ち居振る舞いは誰もが期待したものであり、言いたいことを言いつつも、その期待にキツチリ応えるエンターテインメント肌はさすが。さしもの木村氏も照れ笑い苦笑いを繰り返すしかない。ご夫婦揃って木村氏とは35年来の親交があるという。内田氏に至っては、もはや戦友と呼んでもよさそうであ

る。青蓮院門跡・華頂殿の襷絵のお披露目にもご夫婦揃っての出席であったらしく、それからしばらく経ったある日、樹木希林さん本人が、「板戸が四枚あるけど、描きますか？」と打診に及ぶ。そして「蘇る蓮」と題された、枯れた蓮の画が板戸を飾り、同書に樹木希林さんはこう寄せた。

「木村英輝の仕事ぶりが好きだ。愉快である。見ていて笑える。（中略）お茶の時間は自分のことを語る。絵を描く時間は誰とも一緒なんや。何年かかったなんて言うのは才能は無いんや、考えがまとらんから、あーでもない、こーでもない言うて、時間はつかり経つや。（中略）家を建て直した時四枚の板戸を作った。絵描きが見つからなくて四年。枯れ蓮が描かれてすこく締まった。板戸が腐って朽ちても絵の具は残るらしい。なんか木村英輝のようだ……」

「画伯なんて呼ばれたくない」と豪語し、「世の中に天才なんてそんなにおもやない。ほとんどは偽物や」と言い放つ木村氏にとって、「絵描き」という呼び名は実に優しさに満ちているように思えるし、雑談の中心は泉大津生まれの筋の通ったフライドを、微笑ましく表現しているようでもある。

当然、締めくくりはライブ（コンサートと呼んだ方がいいのだろうか）であった。この日のために駆けつけた「万口」の大野真澄氏が、「レイニーウッド」を伴って上久保純氏が、そして元「スパイダース」の井上堯之氏が順にステージを預かる。そして最後は、ほんの少しの予定調和、内田裕也氏がオールスターキャストをバックに從えて「曲飛び入り。ジョーベンハウエル」でフィナーレを迎えた。

## 列席者を自慢しても詮無いこと ここは始まりの地、京大西部講堂

何もVIPが集った会をこぞ見たいのではないし、主催者である木村英輝氏は断じてそれを望むような方ではない。若い世代からすれば、この夜壇上に立った人々はお馴染みではなかったかもしれないが、忘れてはいけない。彼らは戦つことを知っている人達である。「キター」を持って不良、「共闘せざる者は人に非ず」……さまざま、そして時に理不尽なセオリーに抗い、自らのポリシーのみを信じ、軌跡と道標を具現した人々だ。それも巨大な敵と戦い、そして少なくとも、心折れず、



「西部講堂は、その薄汚い殻から抜け出さない限り、世代を越えたクリエイティブなメッセージを生みだしたいと考えていました。その閉ざされたイメージを、せめて私の出版記念の集いのときだけでも、明るく開いてみたいのです。ちょっとしたお洒落をしてご出席いただければご機嫌です」

京都市ミュージックシーンの起点となった京大西部講堂。その京大西部講堂を、その後の京都のミュージックシーンと引き換えてみたとして、殻は薄汚いままなのか、それとも洗練されてきてきているのか、それは解らない。だが当コナーは、引き続き彼らが築き、残してくれた文化が、どのように成熟し、変遷しているのかを、これからもできるだけつぶさに見ていきたい。

